

## 批評と紹介

アンドレアス・ボック著

両叙事詩、各種プラーナ文献に言及される  
サーガラ族とガンガー河降下伝説

原 實

1979年3月18日に長逝した P. Hacker には<sup>(1)</sup>、本邦の前田専学氏がその学統の一端を継承する Śaṅkara 研究<sup>(2)</sup>と今一つ、その重要性に於いてこれに勝るとも劣らない中世インドの著者不詳文献の研究がある。その最も顕著な成果は彼の Prahlāda 伝説研究に結晶しているが<sup>(3)</sup>、この学統は門下の K. Rüping によって継承された<sup>(4)</sup>。その線上に位するものとしてここに紹介しようとする A. Bock 博士の研究がある。

ところでここに扱われる「Sagara 一族と Gaṅgā 河降下伝説」とは両叙事詩、各種 Purāṇa 文献に言及されるもので、インドの神話伝説の中でも特に人口に膾炙し、本邦にも幾度びか紹介されている<sup>(5)</sup>。今その原初形態と思われる P(urāṇa) Pañc(alakṣaṇa) (Textgruppe I) に語られるところを略述すれば以下の如くである。

Rāmāyaṇa の主人公 Rāma の属する Ikṣvāku 家にはその昔 Sagara と名づくる王があり、父王 Bāha は敵軍勢に王国を奪われて無念の死を遂げた。王の胤を宿していた妃 Yādavi は夫王の後を追って果てようとするが、聖者 Aurva に助けられ、彼の庵で息子 Sagara を産みおとす。しかし彼の誕生前、母は第二夫人に毒 (gara) を飲まされていた故に、息子の名は Sagara といわれる。Aurva 仙は彼を慈しみ、長づるに及んで Agni の神秘的武器を授けた。Sagara はこの武器によって敵を退治し、父王の雪辱を果して天下を統べ、馬祠 (Aśvamedha<sup>(6)</sup>) を催したが、犠牲馬は放牧中にいづこともなく連れ去られた。Sagara は息子達に行方不明となった馬の搜索を命じ、命を奉じた息子達は地の果て、大海の底まで掘ったが、容易にそれを見出すことができなかった。偶々馬を見出した彼らはしかし、Kapila の相をとった Viṣṇu の睨むところ、4 人を残して悉く灰と化した。しかし Hari-Nārāyaṇa は Sagara に王統の不滅を約し、彼に海 (Sāgara) を息子として与える。Sagara は海より犠牲馬を恢復して百の馬祠を催したが、彼

には6万人の息子があつたと伝えられる。然らば彼の息子達は如何にして誕生したか。Sagaraに二人の妃があり、Aurva仙は両女に予告して一は6万人、他は世継ぎの一子を得るであろうという。この中6万人の息子達の方は既述の通りNārayaṇaの眼より発した火によって灰と化するが、他の一妃は一子Pañcājanaを産み、それよりAmṣumat, Dilīpa, Bhagīrathaと次第する。最後のBhagīrathaは苦行の末Gaṅgā河を天より降下せしめて海に導き、Gaṅgā河は彼の娘となつたと伝えられる。

このPPañcにみられる物語は異つた形で各種各様に伝えられた。Sagara王物語のよつて来たる因縁譚(Agastya, Paraśurāmaの梓組)、二妃の名、Aurvaに相当する仙人の名を始めとして細部に到れば異同出入に基だしさを加え、梵天崇拜者、Viṣṇu教徒、Śiva教徒は夫々の立場から同一物語を多様に増広し、且つは改竄した。

本書の著者A. Bockはこれら総ての伝承を集め、その間の出入増広の跡を綿密に精査して各伝承の伝えるところがその原初形態からどのように歴史的に發展して行つたかを文献学的に跡づけた。その成果は文献学的にも、又宗教史的にも示唆するところ少くない。全12章より成る本文(pp. 6~209)に続く註記部分(pp. 210~333)は最近までの研究史を踏まえて、言語学的、文献学的、宗教史的にも読者を啓発するところ大なるものがある。以下に章を追つて本書の概観を試みるであろう。

著者は先づ第一章に於いて既述のPPañc. 327. 53~337. 77abにみえるSagara伝説を扱い、Br-H稿本がBḍ-Vāのそれに先行している事情を明示する。更にŚiva Purāṇaの二つの伝承がBr-HとBḍ-Vāの両者の分立の基礎となつたtextを知つていたことを確認し、W. Kirfelの仮説の正当性を立証した。

第二章はR(āmāyaṇa) I. 37~43を扱う。三つの点でPPañcと異つているとはいへ、Rの編者はBḍ-Vāに拠つていたことは明らかであるが、部分的にBr-Hに近いところもあり、しかも物語の順序はPurāṇa文献群II(TG II)に従つてゐる。PPañcに於いてViṣṇuが最高神とされるに對し、Rでは梵天がこれにとって替つてゐる。この事實はしかしRの伝承の古さを立証するというより、梵天崇拜者達がPPañcのそれを改変したものと思われる<sup>7)</sup>。

第3章はM(ahābhārata) III. 104~108を扱う。ここでこの物語はAgastyaの大海併呑物語に連接し、Sagara王の馬祠の記述に特別の考慮が払われている。概してRの線を繼承するが、他にBr-Hに拠つてゐることも章句の比較によつて明らかとなる。2王妃の役割は他の伝承にみえるところと逆転し、神格としてはŚiva神がここで主役を演ずる。従来MのRへ

の先行説 (R. Fick, A. Holtzmann, H. Lüders) はここに斥けられるが、M, R 共に南北両伝本が存在しその伝えるところが異なるから、問題は一律には扱い得ない。著者はこの点も周到に論じている。尚、両叙事詩とも Sagara に到る Ikṣvāku 王統史に触れていないのは注目されねばならない。

第4章に扱われる V(iṣṇu) Dh(armottara-purāṇa) I. 17~18 の編者は M. R. PPañc (TG I) を踏まえる。但しここで Dhundhumāra より Bāhu に到る Ikṣvāku の系譜が語られ、Sagara を惹んだ仙人は Cyavaṇa (R では Bhṛgu), 又馬を盗んだ者は Kapila (R では Indra) その人とされる。最後の点は Raghuvamśa III. 50 と符号し、本典と詩人 Kālidāsa の時代的近接性を示唆するものの如くである。主役を演ずる神は Viṣṇu であるが、この部分に接続する I. 19 が先行部分と編者を異にしている事実は仔細な文献学的研究によって立証される。

第5章は成立史的に次に位する Vi(ṣṇu Purāṇa) 4. 4 を扱う。編纂者はここで Viṣṇu を前面に押し出すから、勢い Śiva が主役を演ずる Gaṅgā 降下の部分は簡略化される。性悪の王子達を懲しめるために Kapila は馬を奪うが、彼は Viṣṇu の一部分 (amśa-bhūta) であり、従って彼は元来忿怒を離れているから、王子達の壊滅は梵杖の致すところ (brahma-daṇḍa-hata) とされる。Gaṅgā 川も Viṣṇu との連関に於いてここに聖河となり (māhātmya), その水はひとり Sagara の息子達のみならず、一切生類を浄めて天に導くとされる。

第6章に扱われる Bhā(gavata Purāṇa) 9. 7~9. 15 は R の線を受けるとはいえ、極めて特異である。Viṣṇu 崇拜はここに更に強化され、Gaṅgā 降下に重きをなす Śiva も彼の下に習合される (Inklusivismus)。王子の壊滅にも Indra が介入し、Kapila は直接関与しない。Kapila は Viṣṇu の化身 (gṛhita-deha) として、名色 (nāma-rūpa), 善悪 (pāpa-puṇya) 存在非存在 (sad-asad-vimukta) 等の二元を超えるから俗念 (pṛthan-mati) をもたぬ故である。概して Vedānta 的色彩が濃厚となり、māyā の概念も漸く顕著となる。更に Kapila の中に神をみて感激する Aṃśumat の Viṣṇu 讃歌には bhakti の要素が横溢している。興味深きは又、ここで例外的に Kapila は Sāmkhya 哲学の開祖と同一視されていることである。

第7章は Brahmāṇḍa Purāṇa I. 2. 27 及び 2. 3. 21~58 に伝えられるものを扱う。編者は M. に主として拠りつつも他の諸伝承 (R. Vi. VDh) をも参照してこの物語を構成した。しかし異質要素の調整が必ずしも成功しない場合、そこに当然のことながら矛盾が露呈されることとなる。Bock はそれを就中 Gaṅgā の四流 (Sitā, Alakanandā, Sucakṣus, Bhadravati) の記述に於いて検討している。Viṣṇu はここで Indra, Śiva, Brahman の上に

位するが、尚その上に「運命」(kāla) が君臨する如くであり, dhṛti, dharma, vrata, tapas の重視, 僧職階級優位の思想は本編の編者が Viṣṇu 教徒であるよりむしろ Smārta 派の者であったことを推測せしめるとしている。

第8章は Bṛhannārādiya Purāṇa と Nārada Purāṇa との関係箇所を扱う。主として Vi. に拠るとはいえ、そこには Gaṅgā 河の聖河性と浄化作用, 王子達の昇天に際しての Yama の地獄よりの彼らの解放, そして就中 Viṣṇu 崇拝法 (Hari-prīti-kara) にまつわる Bhṛgu と Bhagīratha との対話 (smaraṇa, pūjā, mantra) 等, 他にみられぬ諸特徴が看取される。Viṣṇu 呼称中に paśu-pāśa-vimocaka (p. 300) のあること, bhakti に10種分類すること (p. 283) 等も宗教史的に興味あり, mūrti の概念の導入はこの物語に他派習合の色彩が濃厚であることを示している (p. 156)。

第9章は Brahma Purāṇa, Gautamī-māhātmya 78 を論ずる。もと梵天の瓶 (kamaṇḍalu) に淵源する Gaṅgā 河は Kṣatriya Bhagīratha のみならず, バラモン Gautama の不本意にも殺してしまった牛を再生させるために Śiva の頭髮を通して降下した。一は北に注いで Bhāgīrathi となり, 他は南海に注いで Gautamī となるといわれる。Kapila の眠り, 忿怒も他の伝承と異り, 概して Śiva 教徒の手になった痕跡を留めている。

第10章に扱われる Padma Purāṇa, Svarga-khaṇḍa (PdSv) 15~16 は M. の特定伝本と符合しているが, Bhā. との類似は当然この text が Viṣṇu 教徒の手に成ったことを立証している。尚ここには Bhagīratha の語源にまつわる彼の奇怪な誕生物語 (bhagamātrataḥ) と Airāvata の Gaṅgā 河懸想物語が新奇に語られている。

第11章の Padma Purāṇa Uttara-khaṇḍa (PdU) 21~22 は Viṣṇu の洗足水 (viṣṇupādodakī) に由来する Gaṅgā 河, 就中その流域に位する巡礼地 Haridvāra の霊験, その地で Viṣṇu の神像を拝する効験を説く。Text の編者は新旧様々な要素を寄せ集めているから, 記述に一貫性を欠き, 内的矛盾を露呈している。

第12章は先ず Brahma-vaivarta Purāṇa と Devī-bhāgavata Purāṇa の該当部分を論じ, そこで Gaṅgā 川が Kṛṣṇa の妃となり, Kṛṣṇa 信仰 (bhakti) の枠組に組み入れられている事情を明らかにしている。Gaṅgā 川はその名を想起し (nāma-smṛti), 思念 (dhyāna, saṃkalpa) するのみで浄罪, 解脱を齎すといわれる。次いで, Skanda Purāṇa 5. 3. 56. 1~12, 5. 3. 175 Mahā-bhāgavata Purāṇa, Bṛhad-dharma Purāṇa に言及される Sāgara-Gaṅgāvatarāṇa 物語が簡単に紹介され, それらの特徴が論ぜられている。

本論の最後 (Anhang) には本書の精髓ともいべき物語系統図が提示され (p. 197), 読者はこれによって text の系統を一目瞭然知ることができ

る。更に二つの Verskonkondanz (PdSv—MBh, PdU—PPañc) が添付され、第二部 (註) に接続している。

これを要するに A. Bock は中世ヒンズー教文献の諸処に散見する Sāgara-Gaṅgāvataṛaṇa-Mythus を集め、その増広発展の跡を文献に基いて歴史的に綿密に明示した。同一の物語は異った宗派人に採り上げられ、彼らはそれをそれぞれの立場から改変したから、個々の text に誌される同一物語は中世インド宗教史の一側面を反映している。著者はこの立場からこの神話の特徴を丹念に精査した。周知の通り Purāṇa 研究には文献史的 (texthistorisch) と宗教史的 (religions-geschichtlich) の二つの方法があるが、Bock の研究はこの二つをもの見事に調和している。われわれは著者 A. Bock の労を多とすると共に、P. Hacker によって樹立された学統が現在尚忠実に継承、発展されているのをここに見る<sup>(8)</sup>。

Andreas Bock, *Der Sāgara-Gaṅgāvataṛaṇa-Mythus in der episch-purāṇischen Literatur* (Alt-und Neu-Indische Studien, herausgegeben vom Seminar für Kultur und Geschichte Indiens an der Universität Hamburg) 27. (Franz Steiner Verlag Wiesbaden GmbH, Stuttgart 1984)

## 註

(1) P. Hacker の著述目録は L. Schmithausen によって網羅されている。

Paul Hacker, *Kleine Schriften* (Glasenapp-Stiftung 15), herausgegeben von L. Schmithausen (Wiesbaden 1978), pp. IX-XXI.

尚、遺稿は近時 K. Rüping の出版するところとなった。

*Grundlagen indischer Dichtung und indischen Denkens*, von Paul Hacker, † aus dem Nachlass herausgegeben von K. Rüping (Wien 1985).

(2) Cf. W. Halbfass, *Studies in Kumārila and Śaṅkara* (Reibek 1983), pp. 32ff.

(3) *Prahlāda. Werden und Wandlungen einer Idealgestalt* 2 Bd. (Wiesbaden, 1960).

(4) K. Rüping, *Amṛtamanthana und Kūrma-Avatāra* (Wiesbaden 1970).

(5) 上村勝彦「インド神話」(東京書籍 1981)。pp. 81-89。

田中於菟弥「インド神話」(筑摩書店 1982) pp. 65-68。

尚 Rāmāyaṇa に伝えられる物語については、岩本裕「ラーマヤナ」

1 (東洋文庫 376, 平凡社, 1980) pp. 117-133.

又、この物語は哲学者 Hegel の知るところであった。

竹内敏雄訳 ヘーゲル全集 19 a 「美学」第二巻の上 (岩波書店 1965) pp. 898-902.

(6) この部分については W. Kirfel の二つの研究が参照される。

Rāmāyaṇa Bālakāṇḍa und Purāṇa (*Kleine Schriften* pp. 76-91).

Der Aśvamedha und der Puruṣamedha (*Kleine Schriften* pp. 179-190).

(7) Vaiṣṇava, Śaiva の他に梵天崇拜者の一群があり、彼らが他派の伝承を改竄したと思われる例は他にも認められる (K. Rüping, *op. cit.*, pp. 27-28, cf. Bock p. 41).

(8) 類似の方法論を用いて近時 Bock は今一つの別の神話の研究を発表している。

A. Bock, "Die Madhu-Kaiṭabha-Episode und ihre Bearbeitung in der Anonymliteratur des Pāñcarātra," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 137 (1987), pp. 78-109 (schematische Darstellung der Beziehungen der untersuchten Texte p. 108).

更に彼は二つの Upa-purāṇa にみえる同一主題をめぐって近時、別の論稿を発表した。

"Zwei Fassungen des Sāgara-Gaṅgāvatāra-Mythus im Mahābhāgavatapurāṇa und Bṛhaddharmapurāṇa," *Hindusmus und Buddhismus, Festschrift für Ulrich Schneider* (Freiburg 1987) pp. 38-60.

M.W.マイスター編著

## シバ教討論集

原 實

本稿の筆者は近時、或る書肆の依頼によって Śiva 教、就中 Pāsupata 派について一稿を草したが、その折不覚にもここに紹介する M. Meister 編著の大冊のあることを知らなかった。北米の美術史家 St. Kramrisch 女史に捧げられた本書は1981年春、Pennsylvania 大学で開催された Symposium の紀要で、そこには24人の美術史家、画像学者と少数の文献学